台北日本人学校における国際理解教育と現地校の現状について

前台北日本人学校　校長
茨城県つくば市立大穂学園前野小学校　校長　亀　山　佳　久

キーワード：台北、国際理解、國民小學、國民中學

１．はじめに

(1) 台湾について

台湾とは通称であり、正式名称は「中華民国」である。台湾の面積はほぼ九州地方と同じくらいである。人口は約2300万人である。気候は、北回帰線が経島中部を通過し、熱帯と亜熱帯が共存している。宗教・信仰の自由が憲法で認められている。政治制度は、中華民国憲法によれば、「三民主義に基づく民有、民治、民亨の民主共和である」と規定されている。経済も自由主義である。日本と同じように、議会制度に基づいた民主主義、自由主義の国である。台湾は、近年目覚ましい発展を遂げ、先進国となっている。

1895年から1945年まで日本は台湾を統治していた。日本と同じ教育制度であった。現在も６・３・３制をとっている。日本統治時代にインフラが整備されたことや当時の日本の対応等から、日本に好感を持っている人が多く親日的である。国内の治安もよく、日本人にとっては、とても住みやすい環境となっている。経済状態は、さまざまな景気指数等からも、目標には達していないものの少しずつ成長し続けている。また、昭和47年、日本と中国の国交正常化により、台湾にあった日本大使館が撤退となった。そのため日本交流協会が設立され、台湾国内に台北事務所と高雄事務所がおかれている。

台湾東海岸の風景

(2) 台北日本人学校について

台北日本人学校の歴史は古く、その設立は1947年（昭和22年）台湾大学独身宿舎「台湾省留用日僑子女教育班」までさかのぼる。1945年までの50年間は台湾を日本が統治していたため、多くの日本人が住んでいた。敗戦とともに日本統治ではなくなりほとんどの日本人は帰国したが、一部の日本人は政治的あるいは経済的な理由等により台湾にとどまった。その詳しい人数は把握されていないが、その数２千人とも５千人とも言われている。その中には教育を受けるべく子女もおり、子女教育のための学校が必要になったと言われている。その後、6度の移転と変遷を重ね、昭和58年に天母地区に新校舎が建設され、現在に至っている。台北市教育局より「台北市日僑學校」として認可を得ている台湾日本人会設立の私立学校である。

学校運営は、日本人会・日本交流協会台北事務所・学校の代表者からなる学校運営員会が行っている。学校運営委員長は、日本人会理事長と定められている。平成27年度の小学部中学部合わせた児童生徒数は、820名前後で推移していた。近年は、微増の状態が続いている。

教育内容は文部科学省の学習指導要領に基づいて教育課程を編成してる。日本国内で実施されている授業に加えて、中国語と英語活動を小学部１年から中学部３年までそれぞれ１時間ずつ行っている。また、海外の日本人学校では例のない課外活動を実施している。保護者が運営する日本の部活動のような活動である。体育系課外活動が11部、文化・芸術系課外活動が７部ある。小学校高学年から多くの児童生徒が参加している。

登下校はスクールバスが３台出ているが、多くは徒歩で通学している。小学部は保護者送迎を義務づけ、中学部は生徒のみの登下校を認めている。これも治安のよさからできることである。

２．台北日本人学校の国際理解教育

(1) 現地校との交流

現地校とも長年にわたって交流を行っている。定期的な交流は、近隣の台北市立学校との交流である。

小学部１・２年生は士東國民小學、小学部３・４年生は蘭雅國民小學、中学部１・２年生は天母國民中學とそれぞれ相互交流を行っている。お互いに日本と台湾の文化を理解するよい機会となっている。異文化交流と通常の授業にも参加し、お互いに理解が深まるように年々工夫改善に努めている。中学部３年生は、現地の高校へ出向き、授業体験や交流活動を行っている。

その他、私立学校との交流や飛び入りでの現地校との交流、専門学校と中学校との交流もある。お互いに言葉が十分に理解できない面もあるが、よい交流活動となっている。

(2) 現地理解教育

現地理解教育として、まずは、生活科や総合的な学習の時間の授業を通して、現地の地域・文化・歴史を学んでいる。現地の食べ物、生活習慣、日本との文化の違いに着目して学習を進めている。小学部１・２年生は、学校周辺の地域調べを行っている。日本と同じように、徒歩でグループごとに調べ学習を進めている。

小学部３年生以上の社会科では、施設等の校外学習を実施している。消防署・警察署・製菓工場、浄水場・ごみ処理場、TV 局・自動車工場などである。工場は日系企業の工場である。中等部では、1 学年で 2 日間の職場体験を行っている。職種も、公的機関から一般企業、個人商店までとさまざまである。3 学年では近隣の幼稚園で保育体験も行っている。

このように、日本と同様な学習のできる環境にあり、大変恵まれていると実感している。

スカイプ交流

(3) その他

小学部では、日本の学校ともスカイプで交流を図っている。また、修学旅行では台南や台中など台湾国内を訪問し、現地理解に努めている。台湾の歴史を知り、日本との関係の深さを実感する児童も多い。

中学部３年生は、現地の高校を訪問し交流を図っている。また、中学部2年生の修学旅行では、ここ数年はシンガポール・マレーシアを訪問している。両国の文化や歴史を学び、見聞を広めている。

３．現地の教育事情

台湾の教育事情は、日本と似ている面はあるもののやはり外国であるから大きく異なる。教育制度としては６・３・３制を取っているので日本と同様であるが、８月末か９月に新年度がスタートし、６月に学年末が終了する。2014 年度入学生から日本の高等学校にあたる高級中學が、義務教育となった。2013 年度中に義務教育化の話があり、即実施となった。中学３年生は、共通の全国統一テストを受け、希望校を複数記入し、合否が決まる。いずれかの高校には入学できるが、レベルの高い高校や人気校は、当然難易度も高い。少しずつ見直しもあり、若干の変更をしながら推進している。

(1) 近隣の公立学校の現状について

①天母國民小學の現状から

・学校の１単位時間は小学校 40 分。

・算数と国語は担任が指導。他教科は専任教員が指導。

・１学級の定数は最大 29 人／学級、低学年・中学年は最大 25 人／学級

・プロジェクターは全ての教室に常設。ICT（情報通信技術）インフラ整備が進んでいる。

・算数授業は問題を解く指導が中心。教科書とワークと算数教材が関連して制作されており、國よりセットで支給されている。
・低学年23コマ／週、中学年30コマ／週、高学年33コマ／週
・放課後は塾（算数・英語）に行く児童もおり、帰宅時刻は19時から21時頃

②天母國民中學の現状から

・学校の1単位時間は中学校45分、1日7時間、週35時間、年間40週、授業日数200日。
・7限後に、特別授業1時間、復習テスト1時間、午後9時30分迄、学校は自習のための教室を提供。
・日本で言う部活動（課外活動）の活動日は水曜日の7限後～午後6時までと、土曜日の午前中に活動できる。
・少子化で1学級は30人以下の学級が多い。
・教員は大学教員養成課程の卒業が基本だが、修士課程やそれ以上の資格も持つ教員も多く、それが給与に繁栄される。教員もスキルアップして資格を取る事に熱心で、長期休業中にスキルアップしている。
・台湾の教育文化として、学習（勉強）と将来の進路には深い関係があることをよく理解し、生徒は目指す仕事につくためよく勉強する。
・保護者は教育熱心で、高校入試への意識は高く、高校入試は台湾全国統一テストで行い、その得点で各高校への合否が決まる。高校義務教育化となっても同様である。義務教育となり第一希望から数多くの学校を希望できるようになっている。入学試験の準備のため、特に英語、数学、理科の成績向上を願っている。国語や社会は自習できるが、英語、数学、理科は難しいため学校や塾に期待している。学校でも塾でも特に理科と数学に力を入れている。

◎現地校の授業等を参観した感想

・知識注入型の授業形態が多い。
・教室で教師がマイクを使う。日本の学校と比べて1学級の児童生徒数が日本より少ない。
・教科書が、日本と比べ、内容が難しい。
・各教室にプロジェクターが整備されていて、ICT環境が日本より整っている。
・情報教育の時間があって、wordやExcel、Powerpoint、画像処理等が専任教員によって指導されていてPCリテラシーが身に付いている。
・英会話の授業が小学校の1年生から週に2～3時間行われている。家で英語で会話している子供もいる。
・小さい時からさまざまな習い事や塾に通っている児童生徒が多く、家庭の教育に対する意識や感心が高い。

(2) 台湾の教育事情についての考察

台湾は教育に対する国民の関心は、かなり高い。政府も教員数や施設等からも相当の教育費を支出していると考えられる。1学級の児童生徒数も25名前後となっている学校が多い。入学式・卒業式等の日は学校で決定するなど、学校裁量なっていることも多い。学校規模は台北市などの都市部は数千人在籍する学校も珍しくない。家庭の躾の面では日本とかなり違っている。子どもをとても大事にしているが、甘やかしているように思えることも少なくない。学習に対する親、家庭の意識は高く、大学進学に向けて幼少期より熱心に習い事や塾に通わせて取り組んでいる。海外留学に対する意識も高く、米国や日本へ多くの学生が留学している。

大学進学には数学・理科・英語が重要であり、そういった台湾社会の意識が教育にも強い要求となって繁栄しているように思われる。ただ、授業スタイルが知識注入型の一斉授業である事は否めない。自ら学ぶというよりやらされているような子が多い。台湾大学の日本人教授の話では、自立心が弱く日本の大学生より精神年齢では2～3歳幼いという話であった。このことに対する反省からか、ここ数年の間に、佐藤学氏が提唱する「学びの共同体」の導入が始まり、台北市や新北市の小・中・高等学校でも一部導入の取り組みが始まっている。さらに日本の教育のよさを学ぼうと本校を視察される教員も多くみられる。